

三日月の光



禮拜文の卷



御遺文

目次に代へて

- ① 第一號式（二頁）は半紙を用ゐし親筆にて所々振假名を施しあり。三河國荻原神宮寺にて起草せられ、未だ出版せられざるもの。明治三十四五年頃か或は其以前のものと推定せらる。
- ② 第二號式（三頁）は明治三十七年出版の要理問答中のもの。
（要理問答は辨榮上人の親筆にかゝるものなりとは、上人御生存中笹木戒淨上人に物語られしこと笹木上人明言す）
- ③ 第三號式（二頁）は青民遺書中に採録せるもの。
（該書に採録せるは該書編纂者の不十分なる考査に基くものならん。考證上茲に明言す）
- ④ 第四號式（二六頁）は明治四十年七月出版の讚誦要解による。
- ⑤ 第五號式（二〇頁）十二光禮讃文は書翰用巻紙を用ゐたる親筆にて、未だ出版せられ

ざるもの。年代詳ならず、明治四十一年以後と推定せらる。

(VI) 第六號式 (三四頁) は明治四十三年三月出版の折本心の光。特に千葉縣松戸町佛教心光教會の禮拜に用ゐしもの。

(VII) 第七號式 (三七頁) は大正四年四月出版の如來光明會代表井深氏名義にて岐阜縣にて發行せる綴本、(壽量品附)

(VIII) 第八號式 (五六頁) は大正五年より大正九年まで東京小栗氏命を受けて摺當出版せる折本。

(IX) 第九號式 (六五頁) は大正九年九月十一日郵便日附の御手紙 (御手紙は保存) を以て改訂出版を企てられ、數ヶ所改訂の上、笹本戒淨上人に文法上の是正を命ぜられ更に辨榮上人親ら加筆せられしを御生前間に合はすして御遷化後出版 (御親筆書寫眞紙は保存) 現今流布のもの之。

(明治四十三年以來感謝文中に製用せる影の字は後賢の高見を待つ)

(I) 禱詞 (日々此禱詞のこゝろになりて信念いやましむらんことをわがふ)

長にして光なる阿彌陀如來よ慈愛を垂れて我らを覆護り給へ 菩提心をして日々に聖からしめ斯世と共に後の世も安き御國に在らしめ給へ (註— 振假名は原文のまゝ)

朝の祝禱

超世本願の主にして慈悲の聖親なる阿彌陀如來よ。我らは阿彌の力に依りて生き動き (註— 原文が動にして働に非ず) 在ることを得るなり。「聖」は常に憐恤を以て我らを眷み昨夜も我等の身を護り殃禍なきを得せしめ又一日の生命を加へ給へり故に今日も心と身を献げて御祭を顯すの務を爲し奉らん。

聖の知り給ふ如く我らは性質が甚だ弱くして惡に傾き又日々に進ふ所の誘惑、慥らず願くは慈悲の光明を垂れて我等の弱きを助けて惡き (貪欲、瞋、悲、愚痴、癡等の毒を掃ひ給へ願くは此日に於て各自の身を修め職業を勵み些たりとも世の爲め人の爲に聖より

受けたる使命を果たすの光榮を與へ給へ (註— 振假名原文のまゝ)

夕の祈念

聖き御國に儼臨て無上の權威を備へ給ふ阿彌陀如來よ「聖」が私どもに向ふて明き光と新鮮き活氣と聖き糧とを與へて我らの生命を養ひ一日の使命を果たさしめ給へる恩徳を感謝し奉る茲に我らは己の不善なるを感じ神聖正義と恩寵なる聖のみ前に於て心の迷より犯せる罪を發露懺悔し上る (此時黙して犯罪を追憶す) 唯願くは罪に亡る事を好み給はざるあなたよ我らが懺悔を受けて已に犯したる罪咎を許し再び過に陥る事なき潔き正しき人とならしめ給へ斯らの恩徳を深く感じ唯だ言のみを用るに非ず己を献げて清き行爲を爲し聖の子たるの榮光を與へ給はんことを聖き御名に依りて冀ひ上る

南無阿彌陀佛

x x x x x x x

(II) 勤行式

如來光明數德頌 (アミダは一切の佛陀を統攝せる唯一獨尊最終歸趣の如來なるを明す)

佛阿離に告たまはく、無量壽如來の威神光明最尊第一にして諸佛の光明及ぶ事能はざる所なり、是故に無量壽如來を無量光佛、無邊光佛、無礙光佛、無對光佛、炎王光佛、歡喜光佛、智慧光佛、不斷光佛、難思光佛、無稱光佛、超日月光佛と號し奉つる其れ衆生ありて斯光に遇もものは三垢消滅し身意柔軟に歡喜踴躍して善心生ぜむ、若三塗勤苦の處にありて斯の光明を見たまつらば皆休息を得て亦苦惱なく壽終の後皆解脱を蒙むらん。無量壽如來の光明顯赫にして十方を照耀す諸佛の國土に聞こえざることなし、但だ我今其光明を稱するのみにあらず、一切の諸佛聲聞緣覺諸の菩薩衆も咸く共に歡喜したまふ事亦また是の如し。若衆生ありて其光明の威神功徳を聞て日夜に稱説して至心不斷ならば意の所願に隨ひて其國に生ずることを得て諸の菩薩聲聞

大衆に共に歎息して其功徳を稱せられん。其然して後佛道を得る時に至て普く十方の諸佛菩薩に其光明を歎せられんこと亦今の如くならむ。佛の言く我無量壽如來の光明威神の巍巍殊妙なることを説かんに晝夜一劫すともなほ未だ盡すこと能はじ。

◎如來壽量頌 釋尊の本地は「アミダ」即ち無量壽如來なる事不明す

我れ佛を得てより來た經る所の諸の劫數無量百千萬億載阿僧祇常に説法して無數億の衆生を教化して佛道に入らしむ爾しよりこのかた無量劫衆生を度せむが爲の故に方便して涅槃を現す而も實に滅度せず常に此に住して説法す我常に此に住すとも諸の神通力を以て顛倒の衆生をして近づくとも而も見ざらしむ衆我滅度を見て廣く舍利を供養し盡く皆な戀慕を懷きて而も渴仰の心を生ず、衆生既に信伏し質直にして慈柔輒に一心に佛を見んと欲して自ら身命を惜まざれば時に我及び衆僧と俱に靈鷲山に出づ我時に衆生に語るらく常に此に在て滅せずと方便力を以ての故に滅不滅あるを現す餘國に衆生の恭敬信樂する者あれば或また彼の中に於て爲に無上の法を説く汝ら此を聞かず但我滅度せりと謂へり、我諸の衆生を見るに苦海に没在す故に爲に身を現せず其をして渴仰を生せしむ其心の戀慕するに因て乃ち出て爲に説法す神通力是の如し、阿僧祇劫に於て常に靈鷲山及び餘諸の住處に在て衆生劫盡て大火に燒かる、を見る時も我此土は安穩にして天人常に充滿せり、園林諸の堂閣種々の寶をもて莊嚴せり、寶樹には華果多し衆生の遊樂する所なり、諸天は天鼓を擊て常に衆の伎樂を作して曼陀羅花を雨し佛及び大衆に散す、我淨土は毀たす而も衆は燒き盡され憂怖諸の苦惱是の如く悉く充滿せりと見る、是の諸罪の衆生惡業の因縁を以て阿僧祇劫を過れども三寶の名を聞ず諸の功徳を修して柔和質直なる者のみ有て則ち皆我身此に在て説法するを見む、或時は此衆の爲に佛壽無量なりと説く久して乃ち佛を見む者には爲に佛には値ひ難しと説く、我智力是の如し、慧光照すこと無量壽命無數劫久しく業を修して得る所なり、汝ら智あらむ者此に於て疑ひを生ずること勿れ、常に斷じて永く盡くさしむべし、佛語は實にして虚しからず醫のよく方便して狂子を治せむが爲の故に實に在

四

れども而も死と言もよく虚妄を説くこと無が如く、我また世の父と爲て諸の苦患を救ふ者なり、凡夫顛倒の爲に實に在れども而も滅と言常に我を見るを以ての故に而も憍恣の心を生じ放逸にして五欲に著し惡道の中に墮せむ、我常に衆生の行道と不行道とを知て度すべき所に隨つて爲に種々の法を説く、每自是の念を作す何を以てか衆生をして無上道に入て速かに佛身を成就することを得せしめむ。

晨朝の祈禱文

一、獻身の祈禱

法身、報身、應身の聖き名に歸命し奉る。
三身即一に在ます我と尊き唯一の如來よ如來の在さざる處なきがゆへに、いま現に此處にましますと信じて一心に恭敬し奉る。
如來の威力と思恵とに依て活き働き在る事を得たる我は、わが身と心との總てを捧げて事へ奉らん。

二、靈化の祈禱

冀ば一に光榮を現すべき務を果す聖龍を垂れ給へ。
三身即一に在す盡十方無碍の光なる如來よ、如來の眞應身は在さざる處なきが故に今わが此身體は如來の靈應を宿すべき宮なりと信す。
諸の聖者の心宮に在せし如く、常に我等の心殿に在らせ給へ。
今わが己が身を獻て至心に如來の靈應を勸請し奉る靈應常住に我心殿に降臨し轉法輪と六根清淨の恩寵を垂れ給へ。

三、進徳の祈禱

無上の智慧と正義の徳とを備へ給ふ如來よ。
教主世尊が六根常に清淨に光顔長に麗しく在ませしは内靈應に満ち給ひければなり我等も完徳の鑑たる世尊に倣て如何なる境遇にも恣色を變へざることを誓ひ奉る。
願は常に慈悲、歡喜、正義、安忍、剛毅、貞操、謙遜等を體し、外は怨親平等に同

六

五

七

體大悲の愛を以て佗を視るの靈應を與へ給へ。

暮夕の祈禱文

一、感謝の祈禱

法身と般若と解脱の三徳を備へ給ふ如來よ。

如來が與へ給へる明き光と清かなる（氣と新き糧と）に依て我が心靈と身體と俱に

一日の務を果たる恩徳を感謝し奉る。

わが今日の生命は全く如來の賜なれば所有全力を盡して聖旨に仕らん事を誓ひ奉る

願は世の人々が聖旨を承る處ろのわが名を聞ば求道の志を起し、わが行を見れば惡

を止て善に就き、わが心を知ば離苦得樂の心に歸る如き勳を立る力を垂れ給へ。

二、懺悔の祈禱

無上權威なる如來に告白し奉る。

自身は現に是れ罪障の凡夫、心の迷妄よりして爲すべからざる罪を犯かし、爲すべ

きに進み得ざる過に陥れり（行爲と言語と思想となするべし）これみな日の過なり。

實に大なる過なりと感じて至心に懺悔し奉る。

いまより後は悔ひ改め、正善に就からことを誓ひ奉る願は恩寵に依て、再び過に

陥る事なき正き人となさしめ給へ。

三、隨喜の祈禱

無縁救世の大悲者なる如來よ。

我等は常に瞋恚、憎惡、妬忌、復讐、害意、凌辱、凌辱、凌辱等の惡意を以て佗を傷ひ、

亦た人に爲さしめて自ら喜たりき、今は恩寵の光に依り、一切の人類は如來の同一聖

子にして所有人の榮と靈福とは如來の光榮が人に身に實現に外ならざることを知れり

これに依り今より後は人の幸福に於て羨み嫉む事なく、人の躋に於ては傷み慈むこ

とを誓ひ奉る。

願は靈化の行に於て相ひ勵み相ひ扶け得るの聖寵を與へ給へ。

四、發願の祈禱

至善なる如來よ、我等いまより前は無明罪惡の身、終に流轉に赴くのほか途なかり

然に今や召喚の御聲に驚きて遂に如來に歸化し奉れり、願は如來の聖子として永遠

の生命を與へ給へ。（註—歸化として振假名をきえとなれり）

これひとり己が安きを求むるにあらず、總ての人を誘ひて諸共に如來攝取の恩寵に

預んことを冀ひ奉る。

* * * * *

Ⅲ 晨朝の祈禱文

一、獻身の祈禱

法身、報身、應身の聖き名に歸命し奉る。

三身即一に在ます最、尊き唯一の如來よ、如來の在さざる處なきが故に、今現に此

處にましますと信じて一心に恭禮し奉る。

如來の威力と恩恵とに依て活き働らき在る事を得たる我は、我身と心との總てを捧

げて仕へ奉らん、冀は一に光榮を現はすべき務を果す聖寵を垂れ給へ。

二、進徳の祈禱

無上の智慧と正義とを備へ給ふ如來よ。

喬陀摩佛陀が六根常に清淨に光顔長へに麗しく在ませしは内靈應に満ち給ひければ

なり我等も完徳の鑑たる世尊に倣て如何なる境遇にも姿色を變ざること誓ひ奉る

願くは常に慈悲、歡喜、正義、安忍、剛毅、貞操、謙遜、等を體し、外は怨親平等に同體大悲の愛を以て佗を視るの靈應を與へ給へ、

三、靈化の祈禱

三身即一に在す如來よ、如來の眞應身は在さざる處なきが故に今わが此身體は如來の靈應を宿すべき宮なりと信す。

教主世尊の心宮に靈應し給ひしが如く、常に我等が心殿に在らせ給へ、

今や己が身を獻げて至心に如來の靈應を勸請し奉つる、靈應常住に我心殿に降臨し轉法輪と六根清淨の恩寵を垂れ給へ。

暮夕の祈禱文

一、感謝の祈禱

法身と般若と解脱の三徳を備へ給ふ如來よ。

如來が與へ給へる明き光と清き空氣と新らしき糧とに依て一日の務めを果したる恩徳を感謝し奉つる。

今日の生命は全く如來の賜なれば盡未來際に至るまで聖旨に背ざらん事を誓ひ奉る願くはわが名を聞ば求道の志を起し、わが行を見は惡を止て善に就き、わが心を知は離苦得樂の心に歸らんことを冀ひ申す。

二、懺悔の祈禱

無上權威なる如來に告白し奉つる。

自身は現に是れ罪惡の凡夫、心の迷忘よりして爲すべからざる罪を作り、爲すべき事を怠るの罪に陥れり（一日に於て爲したる若は爲ざりし行爲と言語と思想とを省るべし）是れ皆な自からの過なり。實に大なる過りなりと感じて至心に懺悔し奉つる。

いまより後は悔ひ改め邪惡を捨てて正善に就かんことを誓ひ奉る、願くは恩寵に依て、再び過に陥ることなき正しき人と爲さしめ給へ、

三、隨喜の祈禱

永遠の光なる如來よ。

我等は常に嗔恚、憎惡、嫉妬、復讐、害意、凌辱、譏謗等の惡意を以て佗を傷ひ、亦た人に爲さしめて自ら喜びたりき、今は恩寵の光に依り、一切の人類は如來の同一聖子にして所有る人の榮と靈福とは如來の光榮が人の身に實現るゝに外ならざることを知れり。

これに依り今より後は人の幸福に於て嫉み羨む事なく、人の蹟に於ては傷み慈むことを誓ひ奉る。

願くは常に慈心を以て相向ひ、靈化の行に於て相勵み相扶け得るの聖寵を與へ給へ

四、發願の祈禱

至善なる如來よ我等いまより前は無明罪惡の身、終に流轉に趣くのほか途なかりき然に今や召喚の御聲に驚きて遂に如來に歸化し奉れり、願くは如來の聖子として永遠の生命を與へ給へ。

これひとり己が安を求むるにあらず總ての人を誘て諸共に如來攝取の恩寵に預んことを冀ひ奉るのみ。

* * * * *

(VI) 朝の祈禱文

一六

一、懺身の祈禱

法身 報身 應身の聖き名に歸命し奉る

三身即一に在ます最と尊き唯一の如來よ如來の在さざる處なきが故に今現に此處に在ますと信じて一心に恭敬し奉る 如來の威力と恩恵とに依て活き働き在ることをえ

たる我は我身と心との總てを捧げて事え奉らん
冀はくは一に光榮を現はすべき務を果す聖寵を垂給へ

二、勸請の祈禱

我らが主に在ます如來よ 如來の眞應身は在さざる處なきが故に今我此身心は如來の靈應を安置すべき宮なりと信ず 諸の聖者の心宮に在せし如く常に我が心殿に在せ給へ今や己が身を獻げて至心に如來の靈應を勸請し奉る 靈應常住に我心殿に降臨しこの身心を清めて轉法輪を垂れ給へ

三、進徳の祈禱

慈悲と智慧とに在ます如來よ 教主世尊が六根常に清らかに光顔永へに麗しく在ませしは内靈應に充給へければなり、我らも完徳の鑑たる世尊に倣ひていかなる境遇にも姿色を變ひざることを誓ひ奉る、願くは常に慈悲歡喜、正義、安忍、剛毅、貞操、謙遜、眞實等を體し外は怨親平等に同體大悲の愛をもて佗を視るの靈應を與へ給へ

夕の祈禱文

一、感謝の祈禱

生命の源に在ます如來よ 如來か與へ給へる明き光と清き空氣と新しき糧とに依て今日の務を果したる恩徳を感謝し奉る。世の人々が聖旨に仕へまつる我名を聞は求道の志を起し我行を見れば惡を止め善に就き我心を知らば苦を離れ樂を得に至りしは全く如來の如被力なれば深く其恩徳を感謝し奉る

一七

二、懺悔の祈禱

無上權威なる如來に告白し奉る 自身は現に是れ罪惡の凡夫心の迷妄よりして爲すべからざる罪を犯し爲すべきを忘るの罪に陥ひれり是皆自らの過なり實に大なる過なるを自毀して至心に懺悔し奉る 願は我非の汚を滌きて清白靈となし再び過に陥ることなきよう愍をたれて我を護らせ給へ

三、隨喜の祈禱

大慈悲に在ます我が父よ 我は世の人々に對して嗔恚憎惡嫉妬復讐害意凌辱謗讟等の惡意をして向ひたりき今は恩寵によりて一切の人類は皆兄弟姉妹なることを知るされば人の幸福に於て羨み嫉むことなく人の惱みに於ては傷み慈しみ如來の聖旨を體して同胞互に相扶けんことを誓ひ奉る 願くは我が父よ我同胞の爲に光榮と幸福とを與へ給へ

四、發願の祈禱

至善なる如來よ 我は心闇く罪深き常沒流轉の凡夫なりし、然に聖なる召喚の聲に驚きて至心に如來に歸依し奉れり願は我に永遠の生命と常住の平和を與へ給へ、又願くば上は如來の聖寵を被り下は一切の衆生に恩寵を頒つことを得せしめよ、又願くば我を惡魔の誘惑よりさけて聖き道に向上ことを得せしめよ
また與へ玉はれし功徳をもて平等一切に及し同じく聖き心を發して共に安寧に在らんことを希ひ奉る

註——進徳の祈禱の「給へければ」の「へ」及び「變ひざる」の「ひ」は抑生國の訛音——他の諸文中に於ては編者に於て文法に改めたり

一八

一九

(V) (十二光讚)

無量光

十方三世一切の

法報應の本地なる

獨尊統攝歸趣にます

無量光に歸命せん

無邊光

如來四智の光明は

遍ねく法界照(り互り)(しては)

衆生の知見を開きては

一切種智をさとらしむ

無碍光

神聖正義恩寵の

靈徳不思議の力にて

衆生を解脱自由とし

無上道に進ましむ

無對光

絶對無限の光明は

衆生攝化の終局には

諸佛と等しき覺位とし

大般涅槃を證せしむ

炎王光

衆生無始の無明より

惑と業苦の極なきも

炎王光のちからにて

一切の障り除こりぬ

清淨光

如來清淨光明に

我らが塵垢も滌がれて

六根常に清らけく

姿色も自づと潤ふるれ

歡喜光

如來歡喜の光明に

我らが苦惱も安らぎて

禪悅法喜微妙なる

喜樂極なく覺ほゆれ

智慧光

二〇

三三

如來智慧の光明に

我等が無明も(露めぬれば)てらされて

佛知見を開きては

一切の法も悟らるれ

不斷光

常恒不斷の光明に

我等が意志も靈化せば

作佛度生の心として

聖意現はす身とはなる

難思光

甚深難思の光明に

衆生の障も薄らぎて

信心喚起の期いたり

心の曄(わ)は成りぬべし

無稱光

如來の慈光被むりて

心の華の開ければ

融合不思議の靈感は

言も及ばぬ處なり

超日月光

智慧の日月の照す下

光のなかに生活しなば

聖意體する身なりとは

三業四儀に現はるれ

*

*

*

*

*

*

二一

二二

(VI) 心の光

各宗祖の歌

二四

あきらけくのちの佛のみ代までも 光りつたへよ法のともし火

傳教大師

月影のいたらぬ里はなけれども ながむる人の心にぞすむ

圓光大師

あら磯の波もえよせぬ高岩に かきもつくべき法ならばこそ

承陽大師

あすありと思ふ心のあだざくら 夜半に嵐のふかぬものは

見真大師

おのづから邪にふる雨はあらし 風こそ夜のまどはうつらめ

日蓮上人

極樂は逃げき程とき、しかと つとめていたる處なりけり

空也上人

懺悔

我昔所造諸惡業、皆由無始貪瞋癡、從身口意之所生、一切我今皆懺悔

開經偈

無上甚深微妙の法は、百千萬劫にも遇ひ奉ること難し我れ今見聞受持することを得願くは如來の眞實義を解せんとしことを

◎如來光明歡德頌

佛阿難に告たまはく、無量壽如來の、威神、光明最尊第一にして諸佛の光明及ぶこと能はざる所なり、是故に無量壽如來を無量光佛無邊光佛無對光佛炎王光佛清淨光佛歡喜光佛智慧光佛不斷光佛難思光佛無稱光佛超日月光佛と號したてまつる、其衆生ありて斯光に遇ものは、三垢消滅し身意柔軟に歡喜踴躍して善心生ぜむ、若三塗勤苦の處に在て此光明を見たてまつらば、皆休息を得て亦苦惱なく壽終の後皆解脱を蒙むらん、無量壽如來の光明顯赫にして十方を照耀す諸佛の國土に聞えざることなし、但我今其光明を稱するのみにあらず、一切の諸佛聲聞緣覺諸の菩薩衆も悉く共に歡喜したまふこと亦復是の如し、若衆生ありて其光明の威神功德を聞いて日夜に稱説して至心不斷ならば意の所願に隨て、其國に生ずることを得て諸の菩薩聲聞大衆に共に歡喜して其功德を稱せられん、其然して後佛道を往する時に至て普ねく十方の諸佛菩薩に其光明を歎せられんこと亦今の如くならん、佛、言く我無量壽如來の光明威神の巍巍殊妙なることを説んに晝夜一劫すとも尙いまだ盡すこと能はじ。

二六

我れ佛を得てより來たる所の諸の劫數無量百千萬億載阿僧祇常に説法して無數億の衆生を教化して佛道に入らしむ爾しよりこのかた無量劫衆生を度せむが爲の故に方便して涅槃を現す而も實に滅度せず常に此に住して説法す我常に此に住すとも諸の神通力を以て顛倒の衆生をして近づくとも而も見ざらしむ衆我滅度を見て廣く舍利を供養し盡く皆な戀慕を懷きて而も渴仰の心を生ず衆生既に信伏し質直にして意柔軟に一心に佛を見んと欲して自ら身命を惜まざれば時に我及び衆僧と俱に靈鷲山に出づ我時に衆生に語るらく常に此に在て滅せずと方便力を以ての故に滅不滅あるを現す餘國に衆生の恭敬信樂する者あれば我また彼の中に於て爲に無上の法を説く汝ら此を聞かば但我滅度せりと謂へり我諸の衆生を見るに苦海に没在す故に爲に身を現せず其をして渴仰を生ぜしむ其心の戀慕するに因て乃ち出て爲に説法す神通力是の如し阿僧祇劫に於て常に靈鷲山及び餘諸の住處に在て衆生劫盡て大火に燒かるゝを見る時も我此土は安穩にして天人常に充滿せり園林諸の堂閣種々の寶をもて莊嚴せり寶樹には華果多し衆生の遊樂する所なり、諸天は天鼓を擊て常に衆の伎樂を作して曼陀羅花を雨し佛及び大衆に散す、我淨土は毀たす而も衆は燒き盡され憂怖諸の苦惱是の如く悉く充滿せりと見る、是の諸罪の衆生惡業の因縁を以て阿僧祇劫を過れども三寶の名を聞ず諸の功德を修して柔和質直なる者のみ有て則ち皆我身此に在て説法するを見む或時は此衆の爲に佛壽無量なりと説く久して乃ち佛を見む者には爲に佛には値ひ難しと説く我智力是の如し、慧光照すること無量壽命無數劫久しく業を修して得る所なり汝ら智あらむ者此に於て疑ひを生ずること勿れ當に斷じて永く盡くさしむべし 佛語は實にして虚しからず醫のよく方便して狂子を治せむが爲の故に實に在れども而も死と言もよく虚忘を説くこと無が如く我また世の父と爲て諸の苦患を救ふ者なり凡夫顛

二七

◎如來壽量頌 釋尊の本地は「アミダ」即ち無量壽如來なる事なす

倒の爲に實に在れども而も滅と尋常に見るを以ての故に而も憍恣の心を生じ放逸にして五欲に著し惡道の中に墮せむ 我常に衆生の行道と不行道とを知て度すべき所に隨つて爲に種々の法を説く 毎日はの念を作す何を以てか衆生をして無上道に入て速にか佛身を成就することを得せしめむ

◎晨朝の祈禱文

一、獻身の祈禱

法身、報身、應身の聖き名に歸命し奉る。

三身即一に在ます最と尊き唯一の如來よ如來の在さざる處なきがゆへに、いま現に此處にましますと信じて一心に恭禮し奉る。

如來の威力と恩恵とに依て清き働きの在る事を得たる我は、わが身と心との總てを捧げて事へ奉らん。

冀は一に光榮を現すべき務を果す聖寵を垂れ給へ。

二、靈化の祈禱

三身即一に在す盡十方無碍の光なる如來よ、如來の眞應身は在さざる處なきが故に今わが此身體は如來の靈應を宿すべき宮なりと信ず。

諸の聖者の心宮に在せし如く、常に我等の心殿に在らせ給へ。

今や己が身を獻て至心に如來の靈應を勸請し奉る靈應常住に我心殿に降臨し轉法輪と六根清淨の恩寵を垂れ給へ。

三、進徳の祈禱

無上の智慧と正義の徳とを備へ給ふ如來よ。

教主世尊が六根常に清淨に、光顔長に麗しく在ませしは内靈應に満ち給ひければなり、我等も完徳の鑑たる世尊に倣て如何なる境遇にも恣色を變へざることを誓ひ奉る 願は常に慈悲、歡喜、正義、安忍、剛毅、貞操、謙遜等を體し、外は怨親平等に同體大悲の愛を以て佗を視るの靈應を與へ給へ。

◎暮夕の祈禱文

一、感謝の祈禱

法身と般若と解脱の三徳を備へ給ふ如來よ

如來が與へ給へる明き光と清かなる潔氣と新き糧とに依て我が心業と身體と俱に一日の務を果たる恩徳を感謝し奉る。

わが今日の生命は全く如來の賜なれば所有全力を盡して聖旨に仕らん事を誓ひ奉る。

願は世の人々が聖旨を承る處のわが名を聞ば求道の志を起し、わが行を見れば惡を止て善に就き、わが心を知れば離苦得樂の心に歸る如き勳を立る力を垂れ給へ。

二、懺悔の祈禱

無上權威なる如來に告白し奉る。

自身は現に是れ罪障の凡夫、心の迷妄よりして爲すべからざる罪を犯かし、爲すべきに進み得ざる過に陥れり(一日に於て爲したる若し爲ざりし)これみな自の過なり。

實に大なる過なりと感じて至心に懺悔し奉る。

いまより後は悔ひ改め、正善に就かんことを誓ひ奉る願は恩寵に依て、再び過に陥る事なき正き人となさしめ給へ。

三、隨喜の祈禱

無緣救世の大悲者なる如來よ。

我等は常に瞋恚、憎惡、妬忌、復讐、害意、凌辱、譏謗等の惡意を以て佗を傷ひ、亦た人に爲さしめて自ら喜たりき、今は恩寵の光に依り、一切の人類は如來の同一聖子にして所有人の榮と靈福とは如來の光榮が人に身に實現に外ならざることを知れりこれに依り今より後は人の幸福に於て羨み嫉む事なく人の蹟に於ては傷み慈むことを誓ひ奉る。

願は靈化の行に於て相ひ勵み相ひ扶け得るの聖寵を與へ給へ。

四、發願の祈禱

至善なる如來よ、我等いまより前は無明罪惡の身、終に流轉に赴くのほか途なかりき。

然に今や召喚の御聲に驚きて遂に如來に歸化し奉れり、願は如來の聖子として永遠の生命を與へ給へ。(註—歸化に振假名き)

これひとり己が安きを求むるにあらず、總ての人を誘ひて諸共に如來攝取の恩寵に預んことを冀ひ奉る。

心光教會信行清規

安心門

一、眞理の源なる絶對的唯一の如來を本尊として歸命信賴すべき事

二、至善至幸なる大涅槃に到達するを目的とすべき事

三、光明三昧を本とし聖行を以て目的を達する業を實行すべき事

若し人安心なくして行を起さば萬行徒らに施す依て其所歸所求去行を確定して行を起すべきなり。

起行門

一、禮拜門 晨昏また業に就く前後等に於て至誠心に祈禱を捧げて禮拜すべき事

二、讀誦 救世の福音なる聖典を讀みまた師友の教によりて眞理を知り得べき事

三、觀察 瞑想觀念また參究坐禪工夫等によりて心光を發得すべき事

四、稱名 請求感謝の爲めに稱名しまた念佛三昧を以て心光を發得すべき事

五、讚歎供養 讚歎を以て聖徳を讚頌しまた香花珍膳等をもて供養讚禮すべき事

願ありて行なくば其目的を達すること能はず此五聖行は至善の目的に達する行業なり

一、攝律儀戒 一切の罪を造らず

二、攝善法戒

一切善を作す

三、饒益有情戒

一切衆生を利益す

此は是大乘菩薩の大戒なり佛子たるもの隨分に護持すべきものなり。

信後の處世

自ら信じて心光を獲得し光明界裡の人となりて近くは一家一族を感化し尙廣くは布て普ねく衆生に及ぼす自他ともに至善至幸の都に達せむ之を眞實に佛恩を報するものとす。

仰願くは吾諸の同胞衆此趣旨を領し實踐躬行せられんことを

心光教會主唱者

山崎 辨 榮

明治四十三年一月

昨日見し人はと問へば今日はなし明日又誰れか我れを問ふらん

出る息と引く息待たぬ世の中をのどかに君は思ひぬるかな

吉野川其川上を尋ねれば小笹の霽萩の下露

佛法は十七八の亂れ髪云ふに結はれず説くに解かれず

極樂は西にありとは愚かなり北道探せ南にあり

後ちの世は此世を寫す鏡なり好く見合はせて善惡を知れ

皮にこそ男女の色もあれ骨となりては問ふ人もなし

世の中は唯働くに若くはなし流るゝ水の凍らぬを見よ

慾深き人の心とふる雪は積るにつけて道を忘るゝ

火の車造る大工は無れども己が造りて己が乗り行く

降ると見ば積らぬ先に拂へかし雪には折れぬ青柳の枝

奥山の杉のむらだち兎もすれば己が身よりぞ火を出しける

氣は永く心は圓く腹立たず勤めはかたく言は少なし

濁りなき心の水と澄む月は波も碎けて光とぞなる

勘忍の袋を常に首にかけ破れたら縫へ破れたら縫へ
 倒されし竹は其まゝ起き上り倒せし雪は跡形もなし
 勘忍は必ず人の爲めならず請る所は己が身のため
 切り結ぶ大刀の下こそ地獄なり踏み込み行けば後は極樂
 箸とらば主人や親の恩を知れ我が一力で喰ふと思ふな
 忘らず行けば千里の外も見ん牛の歩みのよしおそくとも
 朝夕の飯さへこわしやわらかし思ふまゝにはならぬ世の中
 何事も身のむくひぞと思はずば人をも世をも恨み果てまじ

× × × × × × × × × ×

(Ⅶ) 如來光明會禮拜式

晨朝の禮讚

至心歸命して三たび禮拜す

法身 報身 應身の聖き名に歸命し奉つる

三身即一に在ます最と尊とき唯一の如來よ 如來の在さざる處なきが故に 今現に

此處に在ますことを信じて 一心に恭敬し奉つる

如來の威力と恩恵とに依て活き働らき在ことを得たる我は 我身と心との總てを捧

げて仕へ奉らん 冀はくは一に光榮を現すべき務を果す聖龍を垂れ給へ

如來光明 歎徳章

佛阿難に告たまはく 無量壽如來の威神光明最尊第一にして諸佛の光明及ぶこと
 能はざる所なり是故に無量壽如來を無量光佛無邊光佛無礙光佛無對光佛餘王光佛清淨

光佛歡喜光佛智慧光佛不斷光佛難思光佛無量光佛 超日月光佛と號し奉つる其れ衆生
 有り斯光に遇ものは三垢消滅し身意柔軟に歡喜踴躍して善心生ぜむ若三塗勤苦の處に
 ありて此の光明を見たまつらは皆休息を得て亦苦惱なく壽終の後皆解脱を蒙むらん
 無量壽如來の光明顯赫にして十方を照耀す諸佛の國土に聞こゑざるることなし 但だ我
 今其光明を稱するのみにあらず一切の諸佛聲聞緣覺諸の菩薩衆も咸く共に歎譽した
 まふこと亦また是の如し若衆生ありて其光明の威神功德を聞いて日夜に稱説して至心不
 斷ならば意の所願に隨ひて其國に生ずることを得て諸の菩薩聲聞大衆に共に歎譽して
 其功德を稱せられん其然して後佛道を得る時に至りて普く十方の諸佛菩薩に其光明
 を歎せられんこと亦今の如くならむ佛の言はく我無量壽如來の光明威神の巍々殊妙な
 ることを説かんに晝夜一劫すともなほ未だ盡すこと能はじ。

至心に勸請す

三身即一に在ます如來よ 如來の眞應身は在さざる處なきが故に今我身體は如來の
 靈應を安置すべき宮なりと信す 諸の聖者の心宮に在せし如く常に我等が心殿に在ら
 せ給へ 今己が身を缺けて至心に如來の靈應を勸請し奉つる靈應常住に我心殿に在
 まして轉法輪を垂れ給へ

至心に禮讚す

南無無量壽佛

本有法身阿彌陀尊 迹を十劫に垂れ在し

本迹不二なる靈體の 無量壽王に歸命せん

南無無量光佛

十方三世一切の 法報應の本地なる

獨尊獨攝歸趣に在す 無量光を頂禮す

南無無邊光佛

如來無邊の光明は 四大智慧の相にて

徧ねく法界照しては
衆生の智見を明すなり

南無無礙光佛

如來無礙の光明は
靈徳不思議の力にて
衆生を解脱し自由とす

南無無對光佛

絶對無限の光明に
攝化せられし人はみな
大般涅槃に證入す

諸佛と等き覺位をえ

南無徧王光佛

衆生無始の無明より
惑と業苦の極なきも
一切の障り除こりぬ

大徧王の光にて

南無清淨光佛

我等が塵垢は滌がれて
姿色も自づと潤ほるれ

南無歡喜光佛

我等が苦惱も安らぎて
喜樂極なく感すなり

如來歡喜の光明に

南無智慧光佛

我等が無明も照されて
聖なる眞理示めさるれ

如來智慧の光明に

南無不斷光佛

我らが意志も靈化せば
聖意現はす身とはなる

常恒不斷の光明に

作佛度生の願みもて

南無難思光佛

甚深難思の光明を
至心不斷に念すれば

信心喚起の時いたり
心の障礙とは成ぬべし

南無無稱光佛

如來の慈光被むれば
七覺心の華開らき

神秘の靈感妙にして
聖き心によみかへる

南無超日月光佛

智慧の日月の照す下
光の中に生活す身は

聖意を己が意とし

至心に念佛す

至心に如來を念して心一境に注む
我如來心光に入り如來心光我を攝む
如來心光の外に我なく我如來心光と合一す
聖法然の阿彌陀佛と心を西に空蟬のもぬけ果たる聲ぞ涼しきの道詠に倣へて念佛三昧を修すべし
佛我無二の妙境に入て靈感極りなきを得ん
之を念佛三昧又靈光三昧と云ふ。

至心に發願す

智慧と慈悲とに在ます如來よ
教主世尊が六根常に清らかに光顔永しへに麗はしく
在せしは内靈應に充給へければなり
我らも完徳の鑑たる世尊に倣へて何なる境遇にも姿色を換ひざることを誓ひ奉つる
願はくは常に慈悲歡喜正義安忍剛毅眞謙遜眞實等の徳を體し外は怨親平等に同體大悲の愛を以て他に待し得らるゝように恩寵をたれ給へ

暮夕の禮讃

至心に感謝す

大慈悲に在ます我らが如來よ
如來が與へ給へる明き光と清き靈氣と新たしき糧と
に依て今日一日の務めを果したる恩徳を感謝し奉つる又如來は神聖と正義と恩寵との
光明を以て我らを攝取し靈化し給ふ
今日聖意に契ふ務めを得たりしは全く聖龍の然らしむる處と深く其の恩徳を感謝し奉つる

至心に感謝す

至心に感謝す

至心に感謝す

至心に感謝す

至心に感謝す

至心に感謝す

至心に感謝す

至心に感謝す

如來無量壽頌

四四

我れ佛を得てより來た經る所の諸の劫數無量百千萬億載阿僧祇常に說法して無數億の衆生を教化して佛道に入らしむ爾より已來無量劫衆生を度せんが爲の故に方便して涅槃を現す而も實には滅度せず常に此に住して說法す我常に此に住すれども諸の神通力を以て顛倒の衆生をして近しくと雖ども而も見ざらしむ衆我滅度を見て廣く舍利を供養し盡く皆な戀慕を懷きて而も渴仰の心を生ず衆生既に信伏し質直にして意柔順に一心に佛を見んと欲して自ら身命を惜まざれば時に我及び衆僧と俱に靈鷲山に出づ我時に衆生に語るに常に此に在て滅せずと方便力を以ての故に滅不滅ありと現す餘國に衆生の恭敬信樂する者あれば我亦彼の中に於て爲に無上の法を説く汝ら此を聞ず但我滅度せりと謂へり我諸の衆生を見るに苦海に沒在す故に爲に身を現せず其をして渴仰を生ぜしむ其心の戀慕するに因て乃ち出て爲に說法す神通力是の如く阿僧祇劫に於て常に靈鷲山及び餘の諸の住處に在て衆生劫盡て大火に燒るるを見る時も我此土は安穩にして天人常に充滿せり園林諸の堂閣種種の寶を以て莊嚴せり寶樹には華果多く衆生の遊樂する所諸天は天鼓を擊て常に衆の伎樂を作し曼陀羅華を雨し佛及び大衆に散す我淨土は毀れざるに衆は燒盡さるゝを見る憂怖諸の苦惱是の如く悉く充滿せり是の諸罪の衆生惡業の因縁を以て阿僧祇劫を過れども三寶の名を聞かず諸の功徳を修して柔和質直なる者のみ有て則ち皆我身此に在て說法するを見ん或時は此衆の爲に佛壽無量なりと説く久して乃ち佛を見ん者には爲に佛には値ひ難しと説く我智力是の如く慧光照すること無量壽命無數劫久しく業を修して得る所なり 汝ら智ある者は此に於て疑がひを生ずること勿れ當に斷じて永く盡さしむべし佛語は實にして虚しからず譬の善く方便して狂子を治せむが爲の故に實に在れども而も死と言もよく虚妄を説くこと無きが如く我また世の父と爲て諸の苦患を救ふ者なり凡夫顛倒の爲に實に在れども而も滅すと言ふ常に我を見るを以ての故に而も憍恣の心を生し放逸にして五欲に著し惡道の中に墮せむ我常に衆生の行道と不行道とを知て度すべき所に隨つて爲に種々の法を

四五

説く毎自是の念を作す何を以てか衆生をして無上道に入て速やかに佛身を成就することを得せしめむ

四六

至心に懺悔す
法身と智慧と解脱の三徳を備へ給ふ如來に告白し奉つる 自身は現に是れ罪惡の凡夫、心の至らざるよりして作す可らざる罪を造り 作すべき事を忘るの罪に陥ひれり是れ皆な自からの過なり 實に大なる過りなることを感じて至心に懺悔し奉つる 今より後は悔ひ改め邪惡を捨て正善に就かんことを誓かひ奉る願くは恩寵に依て再び過に陥ること無く正しき人と爲さしめ給へ

至心に讚禮す

如來十二光の尊號を以て稱禮すべし。

本述不二の讚

本有常住法身の 無量光王大日輪
威神の光明永しへに 十方世界に照しては 無明に迷ふ子らが爲 方便不思議の力より 釋迦牟尼佛と現れて 如來の慈悲を示します 譬へば西に日は入も 光は月に映す如と 無量壽王の日光は 牟尼滿月に輝やけり 釋尊出世の本懷を 靈鷲の嘉會に示しける 即ち世尊は寂靜に 彌陀三昧に入ぬれば 本佛彌陀の靈光は 人佛牟尼の身に映し 爾時諸根悅豫し 姿色も殊に清らげく 光き顔は巍々として 威容の光顯かりし 譬へば明淨なる鏡 影が表裏に暢る如と 如來清淨光明は 世尊の感覺に映すれば

四七

諸根は最も清らけく

如來歡喜の光明は

諸佛の常に住ませる

如來智慧の光明は

世間の闇を照しては

如來不斷の光明は

至高徳に在まして

如來萬徳具備りて

三輪完全の鑑とし

人佛牟尼は一向に

本佛彌陀の靈徳は

入我々入は神秘にて

甚深不思議の感應は

願はくは我同胞と

念佛三昧を宗として

至心に念佛す

念佛三昧の心意を用ゆこと朝と同じ

至心に回向す

至善に在ます如來よ

我らわ曾て心開くして

如來の在ますことを

識らざりき

然るに如來の大悲招喚の聲に

驚ろきて至心に如來に

歸依し奉れり願くは我ら

を無限の光明の中に永遠の

生命を與へ給へ又願はくは

奇特なること極みなし

世雄の聖情に融合し

大我の中に安住す

世眼の智慧と現はれて

如實に衆生を導びきぬ

世英の聖意に實現し

最勝道に住しける

天尊の身に現じては

衆生に軌を垂れ給ふ

本佛彌陀を憶念し

牟尼の身意に顯現す

三密正に冥合し

是れ斯教の秘奥なり

世尊の範に隨順し

光の中に生活さなん

釋尊の本懷

如來無盡の大悲より

釋迦牟尼佛の身を現じ

世の群萌を拯はんと

正しく出世本懷の

世尊大事の因縁は

分子れし本具佛性を

形氣に受たる煩惱は

智徳を併べ備へては

衆生無始く無明は

彌陀常照に照す日の

即ち菩薩の階位にて

淨滿月は正覺の

闇に迷ふは凡夫にて

圓かに照して満ぬるは

聖意の現はれ

聖なる聖名を稱へば

如來の無上恩寵を

如來の神聖なる聖意

如來の正義なる聖意

至真にしていと聖き

至善にしていと聖き

至美にしていと聖き

我をすべての同胞と

三界の子を矜れみて

光く道教を聞きては

餘の方便を聞きて

彌陀の法を演たまふ

衆生は本有の法身より

開きて聖きに悟入り

靈化し菩提の徳とはし

眞の佛子と爲むが爲め

恰かも聞き月の如と

映する影の缺盈は

新月進みて十五なる

佛位に登りし姿なり

菩薩は分に光を得

即ち佛陀の覺なり

聖意の現はれ仰ぐなり

我らが感情に満たしめよ

我らが良心を照しませ

我らが意志に現はれよ

靈國をこゝに格れかし

靈國をこゝに格れかし

靈國をこゝに格れかし

安き靈許に在らしめよ

聖きみくに

聖き啓示を被りて
 清きみ天は朝らかに
 雲に聳ゆる高樓は
 瑠璃寶石の莊嚴の
 七の寶の池見れば
 金の沙はきらゝかに
 寶の樹に玉の枝
 みそのに遊ぶ樂みは
 天つ乙女は雲を分け
 みそらに響く聲聞ば
 日々に六度の花の雨
 きしの山吹宛がらに
 三味の鐘に座を占めて
 烏瑟の縁は天にこい
 金の相好妙にして
 巍き威儀は嚴そかに
 菩薩は妙なる法身に
 如来を繞りし装ひは
 無爲泥汗の境には
 大悲心に薫してぞ

三摩耶の窓し開くれば
 常世のみ國現はれぬ
 金銀まに眞珠
 照り耀やくこと窮みなく
 八の功德の水みてり
 清める面にぞ照り徹る
 金の花は咲にほふ
 無爲の都の春ながし
 奏づるしらべ妙にして
 身のをき處も覺ほえじ
 金の庭にぞふりつもる
 何の色ぞとまがふらめ
 仰ぎ奉つれば彌陀尊
 五山の毫光かゞやける
 月のみ顔は圓かなり
 萬の徳は満みてり
 おのゝ威徳備はりて
 雲の月をかこむ如と
 長閑さ有無を離れにき
 分身利物の極なけむ

信仰の大意

竊かに宗教の宗教を案するに、宗教は天人合一または大小二我の調和にありと由之見れば如来の木體は物心不二の畏慮舍那宇宙の大靈にて即ち絶對の大我なり一切衆生

は其の分子にて即ち小我なり然れば如来大我と衆生小我との親密に合一する處に信仰は成立ものとす。

我教祖釋尊は本久遠實成の無量壽佛に在ませど、迹を地上に垂れ給へ生を淨飯の王家に受け迅に無上の道意を發し山に入て道を修ふこと六年終に菩提樹下に於て金剛座上に坐し無明永夜の眠醒て正覺の光明徧なく十方を照し、頓に生死を超て永恆不滅の涅槃を證り給ふ。正覺とは即ち本覺の無量壽と合一したる相にて涅槃とは即ち常住の無量壽に歸一した義に外ならず、然れば教祖佛陀の教は衆生をして無明の眠より醒まし正覺の光と爲し生死を離れて涅槃の常樂を得せしむにあり、若し之を宗教的に象徴せば本覺無量光如来の光明徧なく十方世界を照らし、信念の衆生を攝取め給へ衆生至心に歸命て如来の光明と合ふ時は、如来正覺の光明が即ち我心光と成りうれば知す諸佛の正覺と等しうし、又凡夫の小生命を大我の無量壽に投歸する時は自から諸佛の涅槃と同一に歸り、爰に於て衆生無明の間は如来の覺光に照らされ、凡夫生死の苦は佛陀の常樂に化せらる。

吾曹が信仰の宗教とする處は、如来の光明を獲得し罪惡の我が死し聖き我に更生り光明の生活に入りて聖意を現はす行爲をなすにあり、本如来は一切衆生の大ミオヤにて我らは悉く子なり、然れば吾らは如来に受たる佛性と衆生性の煩惱とを具有す、衆生煩惱我が跋扈して罪惡を恣にす故に道を求むるには自己の罪惡深重なるを自覺し一心に如来の心光を仰ぎ光明の名を稱へて、つねに憶念して止まず然る時は、信念内に煥發し大なる恩寵に攝護せられ、如来心光我に入り我光明に同化せられ、罪惡の心は清き靈心に更生り、如来を離れて我なく、我は是れ如来の子なりと覺る、ミオヤを離れて子の成長することは不可能なれば寤寐に如来を憶念し、我生命は全く無量壽に歸一したるものなれば現在を通じて永遠にまで共にし、如来の命令に行爲ひ、私のはからひを捨て、一切は大ミオヤに一任して生活すべきものなり。

(VIII) 如來光明の禮拜式

○晨朝の禮拜

南無阿彌陀佛 三禮

至心に歸命す

法身 報身 應身の聖き名に歸命し奉つる 三身即一に在ます最と尊とき唯一の如來よ 如來の在さざる處なきが故に 今現に此處に在ますことを信じて 一心に恭禮し奉つる 如來の威力と恩恵とに依て活き働らき在ことを得たる我は 我身と心との總てを捧げて仕へ奉らん 冀はくは一に光榮を現はすべき務を果す 聖龍を垂れ給へ

如來光明歎德章

佛阿難に告たまはく 無量壽如來の威神光明最尊第一にして 諸佛の光明及ぶこと能はざる所なり是故に無量壽如來を無量光佛無邊光佛無礙光佛無對光佛炎王光佛清淨光佛歡喜光佛智慧光佛不斷光佛難思光佛無稱光佛超日月光佛と號し奉つる 其れ衆生有て斯光に遇ものは三垢消滅し身意柔軟に歡喜踴躍して善心生ぜむ若三塗勤苦の處にありて此の光明を見たてまつらば皆休息を得て亦苦惱なく壽終の後皆解脱を蒙むらん 無量壽如來の光明顯赫にして十方を照耀す 諸佛の國土に聞こゑざることなし 但だ我今其光明を稱するのみにあらず一切の諸佛聲聞緣覺諸の菩薩衆も成く共に歎譽したまふこと亦また是の如し 若衆生ありて其光明の威神功德を聞いて日夜に稱説して至心不斷ならば意の所願に隨ひて其國に生ずることを得て諸の菩薩聲聞大衆に共に歎譽して其功德を稱せられん 其然して後佛道を得る時に至りて普く十方の諸佛菩薩に其光明を歎せられんこと亦今の如くならむ佛の言はく我無量壽如來の光明威神の巍巍殊妙なることを説かんに晝夜一劫すともなほ未だ盡すこと能はじ

至心に勸請す

三身即一に在ます如來よ 如來の眞應身は在さざる處なきが故に今我身體は如來の靈應を安置すべき宮なりと信ず 諸の聖者の心宮に在せし如く常に我等が心殿に在ら

せ給へ 今や己が身を獻げて至心に如來の靈應を勸請し奉つる 靈應常住に我心殿に在まして轉法輪を垂れ給へ

至心に讃禮す

南無無量壽佛

本有法身阿彌陀尊

本迹不二なる靈體の

南無無量光佛

十方三世一切の

獨尊統攝歸趣に在す

南無無邊光佛

如來無邊の光明は

徧なく法界照しては

南無無礙光佛

如來無礙の光明は

靈德不思議の力にて

南無無對光佛

絕對無限の光明に

諸佛と等き覺位をえ

南無炎王光佛

衆生無始の無明より

大炎王の光にて

南無清淨光佛

如來清淨光明に

六根常に清らけく

靈應常住に我心殿に

迹を十劫に垂れ在し

無量壽王に歸命せん

法報應の本地なる

無量光を頂禮す

四大智慧の相にて

衆生の智見を明すなり

神聖正義恩寵の

衆生を解脱し自由とす

攝化せられし人はみな

大般涅槃に證入す

惑と衆苦の極なきも

一切の障り除こりぬ

我等が塵垢は滌かれて

姿色も自づと潤ほるれ

南無歡喜光佛

如來歡喜の光明に

禪悦法喜微妙なる

南無智慧光佛

如來智慧の光明に

佛智見を開示ては

南無不斷光佛

常恒不斷の光明に

作佛度生の願ひもて

南無難思光佛

甚深難思の光明を

信心喚起の時いたり

南無無稱光佛

如來の慈光被むれば

神秘の靈感妙にして

南無超日月光佛

智慧の日月の照す下

聖意を己が意とし

光明攝取の文

如來の光明は遍ねく十方の世界を照らして念佛の衆生を攝取して持て玉はす

念佛三昧 次に總回向の文

願はくは此功德を以て平等一切に施こし同しく菩提心を發して安樂國に往生せん

至心に發願す

智慧と慈悲とに在ます如來よ 教主世尊が六根常に清らかに光顔永しへに麗はしく

我らが苦惱は安らぎて
喜樂極なく感ずなり

我等が無明も照されて
聖なる眞理悟入さるれ

我らが意志も靈化せば
聖意現はす身とはなる

至心不斷に念すれば
心の華曜とは成ぬべし

七覺心の華開らき
聖き心によみかへる

光の中に生活す身は
三業四威儀に行爲なり

在せしは内靈應に充給ひければなり 我らも完徳の鑑たる世尊に倣ひて如何なる境遇にも姿色を換えざることを誓ひ奉つる 願はくは常に慈悲歡喜正義安忍剛毅眞操謙遜眞實等の徳を體し 外は怨親平等に同體大悲の愛を以て佗に待し得らるるように恩寵をたれ給へ

南無阿彌陀佛

昏暮の禮拜

南無阿彌陀佛

至心に感謝す

三禮

大慈悲に在ます我らが如來よ 如來が與へ給へる明き光と清き滌氣と新らしき糧とに依て今日一日の務めを果したる恩徳を感謝し奉つる 又如來の神聖と正義と恩寵との光明を被むり今日聖意に契ふ務めを得たりしは全く聖寵の然らしむる處 深く其の恩徳を感謝し奉つる

如來光明歎徳章 晨朝と同之

至心に懺悔す

法身と智慧と解脱の三徳を備へ給ふ如來に告白し奉つる 自身は現に是れ罪惡の凡夫 心の至らざるよりして作す可らざる罪を作り 作すべき事を忘るの罪に陥ひれり 是れ皆な自からの過なり 實に大なる過りなることを感じて至心に懺悔し奉つる 今より後は悔い改め邪惡を捨て正善に就かんことを誓ひ奉つる 願はくは恩寵に依て再び過に陥ること無く正しき人と爲さしめ給へ

如來十二光の讚頌 晨朝の如く

光明攝取の文

念佛三昧

總回向の文

至心に回向す

至善に在ます如來よ 我らは曾て心開くして如來の在ますことを識らざりき 然るに如來の大悲招喚の聲に驚ろきて 至心に如來に歸依し奉れり 願くは我らを無限の光明の中に永遠の生命を與へ給へ 又願はくは上は如來の聖寵を被り下は一切の同胞に聖寵を頒つことを得せしめよ 又我等を惡魔の誘惑よりさけて聖き道に向上むことを得せしめよ

又聖意を世の同胞にしらしめて聖きみ光の中に共に安寧を得むことを希がひ奉つる

南無阿彌陀佛 三禮

晨昏禮拜式終 (註—擬假名原印刷のまじ)

(IX) 如來光明の禮拜式

○晨朝の禮拜

南無阿彌陀佛 三禮

至心に歸命す

法身 報身 應身の聖き名に歸命し奉つる 三身即一に在ます最と尊とき唯一の如來よ 如來の在さざる處なきが故に 今現に此處に在ますことを信じて 一心に恭敬し奉つる 如來の威力と思恵とに依て活き働らき在ことを得たる我は 我身と心との總てを捧げて仕へ奉らん 冀はくは一に光榮を現はすべき務を果す 聖寵を垂れ給へ

如來光明 歎德章

佛阿難に告たまはく 無量壽如來の威神光明 最尊第一にして諸佛の光明及ぶこと 能はざる所なり 是故に無量壽如來を無量光佛 無邊光佛 無礙光佛 無對光佛 炎王光佛 清淨光佛 歡喜光佛 智慧光佛 不斷光佛 離思光佛 無稱光佛 超日月

光佛と號し奉つる 其れ衆生有て斯光に遇ものは三垢消滅し身意柔軟に歡喜踴躍して善心生ぜむ 若三塗勤苦の處にありて此の光明を見たまつらば皆休息を得て亦苦惱なく壽終の後皆解脫を蒙むらん 無量壽如來の光明顯赫にして十方を照耀す諸佛の國土に聞こえざることなし但だ我今其光明を稱するのみにあらず一切の諸佛聲聞緣覺諸の菩薩衆も咸く共に歎譽したまふこと亦また是の如し 若衆生ありて其光明の威神功徳を聞いて日夜に稱説して至心不斷ならば意の所願に隨ひて其國に生ずることを得て諸の菩薩聲聞大衆と共に歎譽して其功徳を稱せられん 其然して後佛道を得る時に至りて普く十方の諸佛菩薩に其光明を歎せられんこと亦今の如くならむ佛の言はく我無量壽如來の光明威神の巍巍殊妙なることを説かんに晝夜一劫すともなほ未だ盡すこと能はじ

至心に勸請す

三身即一に在ます如來よ 如來の眞應身は在さざる處なきが故に今我身體は如來の靈應を安置すべき宮なりと信す 諸の聖者の心宮に在し、如く常に我等が心殿に在らせ給へ 今や己が身を獻げて至心に如來の靈應を勸請し奉つる 靈應常住に我心殿に在まして轉法輪を垂れ給へ

至心に讃禮す

南無無量壽佛

本有法身阿彌陀尊 迹を十劫に垂れ在し

本迹不二なる靈體の 無量壽王に歸命せん

南無無量光佛

十方三世一切の 法報應の本地なる

獨尊統攝歸趣に在す 無量光を頂禮す

南無無邊光佛

如來無邊の光明は 四大智慧の相にて

徧ねく法界照しては

南無無礙光佛

如來無礙の光明は

靈徳不思議の力にて

南無無對光佛

絶對無限の光明に

諸佛と等き覺位をえ

南佛炎王光佛

衆生無始の無明より

大炎王の光にて

南無清淨光佛

如來清淨光明に

六根常に清らけく

南無歡喜光佛

如來歡喜の光明に

禪悅法喜微妙なる

南無智慧光佛

如來智慧の光明に

佛の智見を開示して

南無不斷光佛

常恒不斷の光明に

作佛度生の願ひもて

南無難思光佛

甚深難思の光明を

衆生の智見を明すなり

神聖正義恩寵の

衆生を解脱し自由とす

攝化せられし終局には

大般涅槃に證入す

惑と業苦の極なきも

一切の障り除こりぬ

我等が塵垢は滌かれて

姿色も白つと潤ほるれ

我等が苦惱は安らぎて

喜樂極なく感すなり

我等が無明は照されて

如來の眞理悟入るれ

我らが意志は靈化せば

聖意現はす身とはなる

至心不斷に念すれば

信心喚起の時いたり

南無無稱光佛

如來の慈光被むれば

神祕の靈感妙にして

南無超日月光佛

智慧の日月の照す下

聖意を己が意とし

光明攝取の文

如來の光明は遍ねく十方の世界を照らして念佛の衆生を攝取して捨て給はず

念佛三昧 次に總回向の文

願くは此功德を以て平等一切に施こし同じく菩提心を發して安樂國に往生せん

至心に發願す

智慧と慈悲とに在ます如來よ 教主世尊が六根常に清らかに光顔永しなへに麗はし

く在しは内靈應に充給ひければなり 我らも完徳の鑑たる世尊に倣ひて如何なる境

遇にも姿色を換へざることを誓ひ奉つる 願はくは常に慈悲 歡喜 正義 安忍 剛

毅 眞操 謙遜 眞實等の徳を體し 外は怨親平等に同體大悲の愛を以て佗に待し得

らるゝやうに恩寵をたれ給へ

南無阿彌陀佛 三禮

○昏暮の禮拜

南無阿彌陀佛 三禮

至心に感謝す

大慈悲に在ます我らが如來よ 如來が與へ給へる明き光と清き滌氣と新らしき糧と

に依て今日一日の務めを果したる恩徳を感謝し奉つる 又如來の神聖と正義と恩寵と

の光明を被ひり今日聖意に契ふ務めを得たりしは全く聖寵の然らしむる處 深く其の

恩徳を感謝し奉つる

如來 光明歎德章

晨朝と同之

至心に懺悔す

法身と智慧と解脱の三徳を備へ給ふ如來に告白し奉つる 自身は現に是れ罪惡の凡夫 心の至らざるよりして作す可らざる罪を作り 作すべき事を忘るの罪に陥れり 是れ皆な自からの過なり 實に大なる過りなることを感じて至心に懺悔し奉つる 今より後は悔い改め邪惡を捨て正善に就かんことを誓ひ奉つる 願くは恩寵に依りて再び過に陥ること無く正しき人と爲さしめ給へ

如來十二光の讚頌 晨朝の如く

光明攝取の文

念佛三昧

總回向の文

至心に回向す

至善に在ます如來よ 我らは曾て心開くして如來の在ますことを識らざりき 然るに如來の大悲招喚の聲に驚ろきて 至心に如來に歸依し奉れり 願くは我らを無限の光明の中に永遠の生命を與へ給へ 又願はくは上は如來の聖寵を被り下は一切の同胞に聖寵を頒つことを得しめよ 又我等を惡魔の誘惑よりさけて聖き道に向上むことを得しめよ 又聖意を世の同胞にしらしめて聖きみ光の中に共に安寧を得むことを希がひ奉つる

南無阿彌陀佛 三禮

昭和七年十二月二十五日 印刷
昭和七年十二月二十八日 發行

編輯兼 山崎 辨成
發行人 小石川區關口町六十五番地
印刷人 小林七太郎
小石川區關口町六十五番地
印刷所 靜文社 印刷所
電話牛込五四一九番

東京市小石川區水道橋二丁目四十四番地

ミオヤのひかり社
振替口座東京六六八五一番